

## 日本での国際技術教育プログラムに関する東ティモール人学生の関心度の調査と昨年度との推移

Assessment of Timorese students' level of interest in the international technical education program in Japan and the modifications made from the previous year

グループ名：サレジオ工業高等専門学校 国際言語科

学生氏名<sup>1)</sup>：松木昂

指導教員 教員氏名<sup>2)</sup>：マルケス・ルイス

1) 所属先：サレジオ工業高等工業専門学校 デザイン学科

2) 所属先：サレジオ工業高等専門学校 国際研究

日本語アブストラクト：サレジオ工業高等専門学校で行なわれた国際技術交流会に参加した東ティモール人学生の満足度を昨年に引き続きアンケート調査した。調査結果、対象者の関心度は高いことが伺えた。

キーワード：コミュニケーション，国際技術交流会

### 1. はじめに

2024年2月6日から2月15日の10日間、サレジオ工業高等専門学校（以下サレジオ高専とする）において東ティモールと日本との間で国際技術交流会が行なわれた。これは東ティモールと先進国である日本を結び、双方の技術や異文化間でのコミュニケーション能力を発展させることを目的とした交流会である。本交流会の参加校はサレジオ高専、サレジオ高専の姉妹校である“Don Bosco Fatumaca”並びに“Don Bosco Maumali-Maliana”の3校が参加した。参加人数は、日本側からは学生20名、教師3名の計23名、東ティモール側からは学生10名、教師2名の計12名の合計35名である。本論文では昨年度に引き続き、国際技術教育交流の際に行なった東ティモール人学生を対象としたアンケート調査を基に、本交流会に対する東ティモール人学生の関心度について報告する。

国際技術教育交流会は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の国際青少年サイエンス交流事業である、さくらサイエンスプログラム(S2022F0800253)より支援を受けている。<sup>2)3)</sup>

### 2. さくらサイエンスプログラムについて

さくらサイエンスプログラムとは、2014年に端を発した産学官の連携によりアジアを中心とした国の人々を日本に招聘するプログラムで、6年間で3万人を超える若者が日本を訪れた。このプロジェクトは新たな時代を担う世界の優れた人材を日本に招き入れ、文化や

優れた技術に触れることを推奨している。受け入れ機関として日本の大学や高等専門学校、高等学校などを筆頭とした国内に法人格を有する機関と、国外の送出した機関が作成した交流計画を幅広く公募し採用している。<sup>2)3)</sup>

### 3. アンケート調査

本調査は、参加した東ティモール人学生10名と教員2名を対象としてプロジェクト終了後にアンケート調査を行なった。アンケート調査は5段階評価のものを9問、自由記述のものを7問とした。以下に主な調査項目を挙げる。

- (1) さくらサイエンスプランに参加した目的は達成できたか。また、目的はなにか。
  - (2) 国際技術教育交流は満足のいくものだったか。
  - (3) 日本人学生による補助はわかり易かったか。
  - (4) 再度このような国際技術交流会に参加したいか。また、何を目的に参加したいか
- 全ての質問項目は5段階評価で行ない、最高評価を「5」とし、最低評価を「1」とした。(1)と(4)は自由記述の追加質問を行ない、具体的な意見を訊いた。

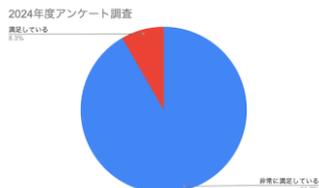
### 4. 調査結果

1つ目の質問では、多くの参加者が目的を達成することができたことが見受けられる。参加目的は自由記述でも回答してもらったが、「科学と技術を学ぶ」や「自国に技術や知識を持ち帰る」といった回答が多く見られた。



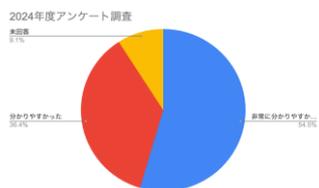
図① さくらサイエンスプランに参加した目的は達成できたか。また、目的はなににか

2つ目の質問では、昨年度に続き今年度も東ティモール人学生からの本交流会に対する評価が高いことが伺える。



図② 国際技術教育交流は満足のいくものだったか

3つ目の質問は日本人学生の補助に関するものである。国際交流会ではサレジオ高専に通う日本人学生が補助に入り、技術指導の補助を行なった。この評価に対し、東ティモール人学生は最高評価である「5」を54.5%の人が選択し、「4」を46.4%が選択した。「回答なし」を除いた全員が4以上の評価で回答している。



図③ 日本人学生による補助はわかり易かったか

4つ目の質問では、再訪日を「強く希望する」と回答したのは12名中10名、「希望する」と回答したのは2名であった。希望しない学生は昨年度に引き続き0%であった。自由記述の回答では、国際交流会で行なった「科学技術やロボに関するプログラミングをより詳しく学ぶこと」や「新しい知識をより多く身につけること」といった技術の習得を目的とした回答が散見された。



図④ 再度このような国際技術交流会に参加したいか  
また、何を目的に参加したいか

#### 4. 考察

以上の結果から次のことが考察される。

考察1. 国際技術交流は昨年度に引き続き高い評価を受けており、満足度の高いプログラムである。

考察2. 東ティモール人学生は自身の技能や国の技術力を向上させる機会を望んでいる。

考察1は、全てのアンケート調査から読み取ることができる。回答者は全てのアンケート調査における回答で、最高評価の「5」、次に高い評価である「4」を選択している。昨年度行なったアンケート調査でも同様の傾向を示しており、このことから国際交流会は東ティモール人学生に対し関心度の高いプログラムであるということが伺える。

考察2はアンケート調査1と2から読み取れる。これらの結果から東ティモール人学生には積極的に最先端の技術を学ぶ意欲があることが伺える。

#### 5. まとめ

これらのことから、東ティモール人学生の本交流会への評価は昨年度に引き続き高いことが伺える。そのため、このような交流会をこれからも続けていくべきだと考える。また、本交流会ではロボット製作の際に回路などの設計は行なったがロボットを制御するためのプログラミングはあらかじめ用意しているものを使用した。自由記述による回答では、「プログラミングを経験したい」といった内容の回答もあった。これらの要望にも応えることでより関心度の高い交流会が行なえるのではないだろうか。

東ティモールは20世紀にインドネシアから独立した国であり、経済的にも安定しているとは言い難い。そのため日本の学校と交流する機会は極めて少ない。東ティモールからの学校の受け入れを支援し、回数を増加することが実現すれば参加者の目的を達成する機会が増加するだろう。国際化が進む現在において将来の技術者が影響し合い、成長することができる環境が望ましいのではないだろうか。

#### 注および参考文献

- 1) Marques, Luis. (2018). "The State Building Process in Timor-Leste: A Study of the Theoretical Foundations of Technical Education". Complex Emergencies and Humanitarian Response. Mitsuru Yamada and Miki Honda (ed s.). Osaka: Union Press. pp. 147-164.
- 2) Japan Science and Technology Agency (JST). (2020). "Sakura Science Exchange Program". Sakura Science Website. (URL: <https://ssp.jst.go.jp/EN/>).
- 3) Marques, Luis. (2021). "The Role of Technical Education in the Process of State-building: The Case of Post-conflict State of Timor-Lest". Graduate School of Social Sciences, Waseda University, Doctor of Philosophy Social Science. Ph. D. Dissertation.
- 4) 国立研究開発法人科学技術振興機構, "概要目的・これまでの実績", さくらサイエンスプログラム, (アクセス日: 2023/4/20) <https://ssp.jst.go.jp/outline/detail/>